

2020 年の日本文学のオンライン授業

－実践をめぐる考察と結果－

The Online Lectures of My Japanese Literature Classes in 2020

－ A Discussion and Reflection of My Approach －

瀬戸 宏太

SETO Kota

キーワード：オンライン授業、日本文学、コロナ禍

Keywords: online lectures, Japanese literature, Corona wreck

概要

コロナ禍に覆われた 2020 年、前期の授業で、私は担当する 6 つの授業をすべてオンラインで行い、中でも日本語日文学科生を対象とした 5 つの科目では、リアルタイムのオンライン授業とした。一般論として、日本文学のオンライン授業では、リアルタイムで行う必然性はあまり高くない。だが他方、大学生活への準備がほとんど整っていない新入生に対して、オンデマンド式の課題配信だけで授業を進めていったのでは、早々にモチベーションが失われてしまうことが危惧された。そこで日本文学のオンライン授業をリアルタイムで行うことの意味を探りながら、授業を進めていったのである。

本稿では、その具体的な方法を示すと同時に、そのような方法を取るに至った考え方と、その結果として得られた反応をデータとして示す。具体的には、パワーポイントのスライド配信とチャットを組み合わせた授業を行なったという話になる。方法論自体は目新しいものではないと思うし、模範的だと考えるわけでもない。ただ、ここに至る試行錯誤を通じて、日本文学の授業において、どのようなことが優先されるべきであり、それが日本文学を学ぶことの価値とどう結びつくのかということ考えた。学生たちの作品への能動的な関わりの重要性に、オンライン授業の側から光を当ててみたのである。

はじめに

2020 年という年が、新型コロナ（COVID-19）という名詞とともに記憶されていくことは、おそらくほぼ確定的であろう。この新たな感染症のために、世界中の人々の平穏な生活が脅かされ、経済的にも多大な損失を出し、日本もその渦の中に巻き込まれた。

大学もまた、そのコロナ禍と距離を置くことは出来なかった。いや、むしろ、日本でのコロナ対策が小中学校のいきなりの学級閉鎖から始まったことから窺われるように、学校は感染の温床と疑われ、したがって、コロナウイルスに対し特別に厳しい対策が求められたと

言った方が適当だろう。私の所属する短大（常葉大学短期大学部。以下、本学と称す）でも、対応に追われた。

三月の卒業式は、規模を縮小しつつもかろうじて行えたものの、四月から新入生を迎えるための行事は廃止され、新生活のためのガイダンスすら、時間を大幅に短縮して実施するよりなかった。そして、五月の連休に向けて構内を完全に閉鎖。授業の開講は三週間遅れることとなった。連休が明けて始まった授業も、従前のように対面式で行うことは出来ず、すべてオンライン授業。教員も学生も先の見通しが立たない不安な状況下で、不慣れな環境での試行錯誤を強いられたのである。

ただ、本学の所在する静岡県では、当初、あまり多くの感染者は出ていなかった。七月末に浜松でクラスターが発生して警戒レベルが引き上げられたが、国の緊急事態宣言が解除された五月末の時点では、いたずらにオンライン授業を継続する必然性も薄かったと言って良い。そこで六月からは段階的に対面授業が再開されることとなった。

結果的に、本学の教員は早い段階で、オンライン授業と対面の授業とを比較し、相対化する機会を得たと言える。オンライン授業をどう進めていかなければならないかということに縛られることなく、対面授業の良さを再確認する中で、オンライン授業の問題点や改善点を分析する余裕を得たということである。

もとより、コロナ禍が完全に収束したというわけではない。むしろ、次の波に備えて、本学でも対策を怠らずにいるというのが現状である。したがって、対面の授業が多く再開されていると言っても、従前の形で実施することが難しい場合もある。特に密集・密接を嫌うという立場からは、演習などで行われる学生間での議論などは、制限せざるをえない。だが、議論を制限して演習が成り立つのか。それで演習と言えるのか。授業をめぐる試行錯誤は、対面式に戻った現在でも続いていると言うべきである。そして、そんな場合、オンライン授業で行っていたような方法を応用してみることで、解決の緒を探すということも、あってしかるべきだろう。

本稿では、そうした立場から、私自身が展開したオンライン授業を見直していこうと思う。もっとも私の場合は、夏休み前まで、すべての担当科目でオンライン授業を継続した。そういう意味では、周囲が対面授業を再開させていく中で、自分はオンライン授業を続けることで何が実現できているのかを問い直し続けたという側面が大きいと言える。対面授業が良いかオンライン授業が良いかの二者択一ではない。あるいはまた、オンライン授業をいかに対面授業に近づけるかという問題でもない。そうではなく、オンライン授業をする時に、日本文学の授業は、どのような優先順位で展開していくことが出来るか。それを考えることが私にとっての課題であったし、本稿の問題意識でもあるということだ。

ここに示す私のオンライン授業の実践例は、それ自体としては目新しくもないだろうし、模範的でもないだろう。ただ、それらを実践することを通じて、日本文学の授業では何が大切にされるべきかを見直そうとしてきた点に、論じる意義を見出したいと思っている。それが、日本文学を学ぶことにはどんな意味があるのかという問いに対して、答えることにも繋がっていくと考えるからである。

1 対面授業とオンライン授業に対する学生の意識

ささやかなデータを提示するところから始めたい。

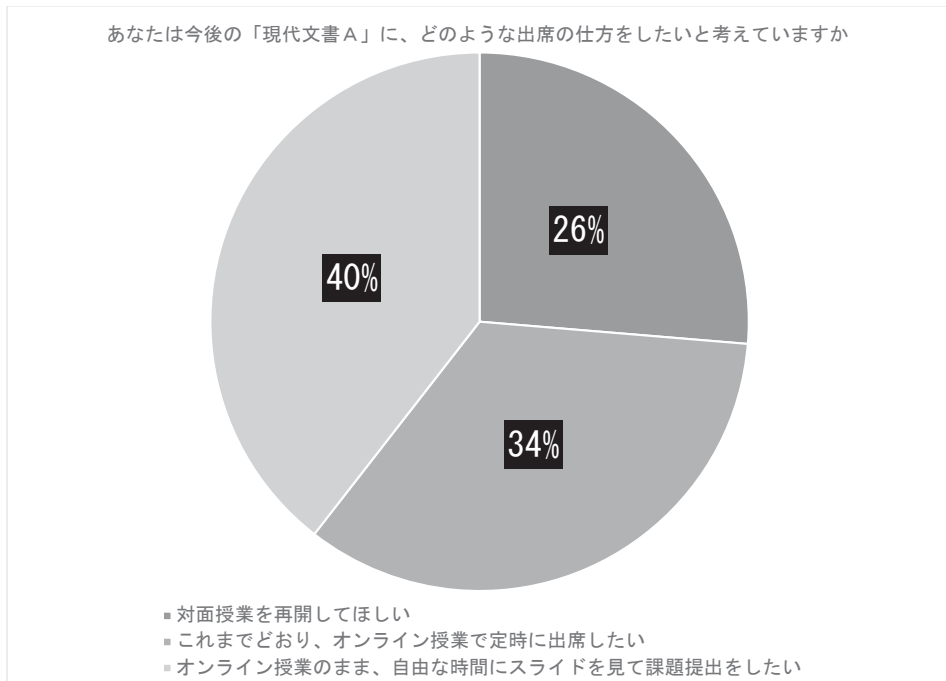


表 1-1 「現代文書A」での対面授業の希望調査

本学では、緊急事態宣言の解除に伴い、六月より段階的に対面授業を再開していった。そこで、私の担当している授業でも、どの程度、学生が対面の授業を望んでいるのか、アンケートをとってみた。その結果である。

アンケートをとったのは、木曜2限に開講している「現代文書A」という、一年生対象の必修科目。クラス単位の授業で受講者数は39名。Teams経由でFormsを用い、記名式(Teamsを経ることで、自動的に回答が名前と紐づけられる仕様になっている)だが、指導・成績評価には一切反映させないと注釈をつけた上で行った。

授業の運営方法についての詳細は後述するが、私の場合、短大の授業はすべてリアルタイムで行っており、時間割通りの定時に出席することを求めている。アンケートはその授業の最後に呈示し、翌週の授業が始まる前までに回答することを求めた(6月11日実施、回答期限6月18日)。回答者数は38名であった。

夏休み前後の報道では、小中学校の授業が再開されているにも関わらず、大学ではオンライン授業が継続されていることに対する不満の声が取り上げられることが多かったように思う。だが、一見してわかるように、この時点ではまだ、対面授業を希望する声が多数派だとは言えない。無論、四人に一人が対面の授業を希望しているということは、軽視して良いレベルではないが、他方、対面の授業が再開されること(または公共交通機関を使って通学す

ること) への不安感も払拭し切れていなかったと見るべきであろう。対面の授業さえ再開されればすべてが解決するというものではなく、オンラインの授業の充実もまた、求められていたということである。

ちなみに、この科目で特にアンケートを実施してみたのは、直前(木曜1限)で対面授業が再開されていたからである。「スポーツA」と「日本文学国際演習」という二つの科目においてであるが、この「現代文書A」の受講生における両者の履修状況は以下のとおりである。

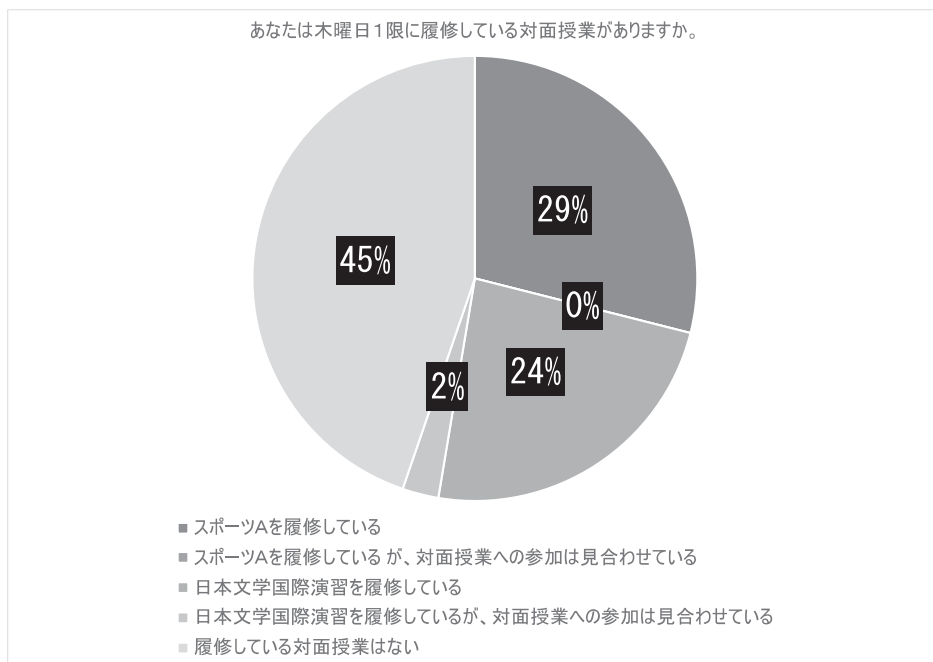


表 1-2 木曜1限(「現代文書A」の直前の時間)の履修状況

履修はしていても、感染への不安から参加を見合わせている学生もいるのではないかと思いい、「対面授業への参加は見合わせている」という選択肢も用意したが、これを選んだ学生は「日本文学国際演習」を履修している学生の中に一人いただけだった(全体の2%)。

この履修状況と、対面授業への希望との相関関係を調べてみると、下表のようになる。

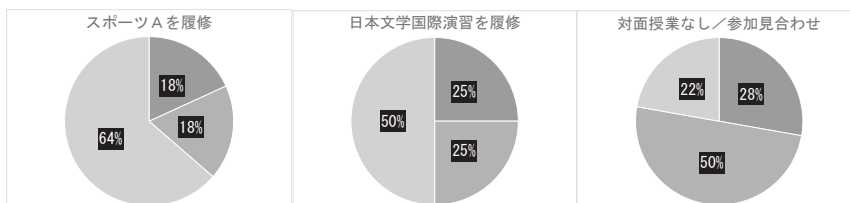


表 1-3 履修科目と対面授業希望との相関

表 1-1 と同じく、色の濃いものから順に「対面授業を再開してほしい」「これまでどおり、オンライン授業で定時に出席したい」「オンライン授業のまま、自由な時間にスライドを見て課題提出をしたい」を選んだ者の比率である。分母が小さいので誤差の範囲は大きめに想定しなければならないだろうけれど、「スポーツA」の受講者で「現代文書A」でも対面の授業が再開されることを希望している者は18%。同じく「日本文学国際演習」では25%。どちらも表 1-1 で確認した全体の数値を下回っている。つまり「対面が再開されている1限の授業を履修しているから、2限の授業でも対面の再開を希望する」ということにはなっていないという傾向は、読み取って良いように思う。そして、当然のことだが、1限が対面の授業の場合、2限がリアルタイムのオンライン授業であることには負担感があることも読み取れる。「スポーツA」では64%、「日本文学国際演習」でも50%の学生が、「自由な時間にスライドを見て課題提出をしたい」と答えているのである。他方、1限で対面の授業を履修していない場合には、対面の授業を希望する率もやや上昇する(28%)が、それ以上に、リアルタイムのオンライン授業の継続を希望する声大きい(50%)。

表 1-1 で見たように、オンライン授業でリアルタイムの継続を望むか、非リアルタイムを望むかの率は拮抗している(34%対40%)。また、表 1-2 からわかるとおり、1限に對面の授業を履修しているかないかは、ほぼ半々である(53%対47%)。ここに上記のような傾向の違いを重ね合わせると、その履修状況によって、オンライン授業に対し、リアルタイム派か非リアルタイム派かに、学生が二分されてしまっているという面が窺えるのではないだろうか。このことは、対面の授業が行えない状況下でオンライン授業をリアルタイムで行ってきたことへの、一定の信任を示しているとも言えそうに思うが、それだけに、対面の授業が再開された後でのこの対立の構図を、個々の教員の工夫だけで乗り越えることは難しいと感じさせる。今後、対面の授業とオンラインの授業を並行させていくという場合(本学に限らず、そういう選択をしている大学が多いと思う)、オンライン授業の方は非リアルタイムとするのが現実的な対応ではあろう。だが、オンライン授業それ自体に限った場合、学生にとってリアルタイムのものの方が好ましいと感じられやすい点をどう考えるか。対面の授業とリアルタイムのオンライン授業とが混在し連続することへの学生の反応は否定的だけれども、無理のないスケジュールが組めるなら、オンライン授業の方もリアルタイムでと考える学生が一定数いるのではないかと思うと、悩ましいところだ。

この問題は、大学が組織として、どのような時間割を学生に提供していくかという戦略的な話なので、本稿ではこれ以上、深く掘り下げることはしない。ただ、オンライン授業の可能性を積極的に考える場合、やがてぶつかなければならぬ壁だということは、指摘しておきたいと思う。

2 リアルタイムのオンライン授業

前節でやや先回りして述べたことと重なるが、オンライン授業は必ずしもリアルタイムであることを必要としない。むしろ学生が自分のペースで取り組めることを重視するならば、オンデマンド方式の非リアルタイムの課題提示にも、メリットは多くあると言うべきであろう。

ただ、それは学習の仕方がわかってきてからの話ではないかとも思う。今年度のように、

入学していきなりオンライン授業が始まってしまったという新入生のような場合だと、高校と大学との学び方の違いも実感できていないのではないか。そのような学生たちが「自分のペース」を容易につかめるものかどうか、私は懐疑的であった。少なくとも、大抵の新入生は、三月までに大学から出された入学前教育の課題をこなしてきた筈でもある。その課題と、大学の授業として出される課題との間に、学生たちが明確な違いを感じられるようにすることは、教員側の責任と言うべきだろう。その方法がリアルタイムで授業をすることだけとは言わないが、入学前と同じように自宅で課題に取り組んでいるという時、それでも新しい環境に踏み出しているのだと実感できる機会が得られなければ、入学直後のモチベーションが早々に失われていくことは想像に難くない。

その点、幸い本学では、全教員・全学生が Office365 を使える環境が整っており、私の所属する日本語日本文学科では、その中の Teams というアプリケーションを使って授業をするという合意形成が早い段階でなされた。リアルタイムでの授業のためのお膳立てが、最初からされていたわけである。

もっとも、このように書いてくると、私が早くからリアルタイムのオンライン授業に積極的だったという印象を与えるかもしれない。白状するが事実は逆だ。Teams を使えばテレビ会議の機能を利用して授業を行えるというところまでは容易に理解できたが、そこでどのような展開に持っていけば良いのかということがイメージ出来なかった。講義系の授業のように、教員の側から伝える時間が大部分を占める場合はもちろんのこと、演習系であっても、日本文学の授業で学生たちに求める作業は、書くことが主体となる。自分が授業で見せたいこと・見たいことは何なのか。そう考えた時、自分の顔と声とを延々とオンライン上で送り続けることにも、学生の姿を監視し続けることにも価値を見出せなかった。それに、四月当初の段階では、その授業を自宅で行わなければならない可能性もあった。新型コロナウイルスの感染状況が悪化すれば、大学は教員に対しても閉鎖されてしまい、教室や個人研究室に入れなくなるからである。その場合、授業の最中に生活音が混入してしまう可能性も否定できない。リアルタイムと言っても、それでは劣化した教室での授業もどきに過ぎないのではないか。さらに後付けの理由として付け加えるなら、五月になって、データダイエットということも言われるようになった。¹リアルタイムで映像や音声を送信するとデータ量が膨大になる。全国の学校のすべての授業でそのようなことが行われると、データ通信の帯域が圧迫され、本当にその種の授業を行わなければならないケースで障害が生じる可能性がある。だから、あらかじめ録画して圧縮した動画を配信するなどして、その上で学生へ課題に取り組ませるよう工夫してほしいというものだ。

このような論文を書いているが奇妙に聞こえるかもしれないが、これらのネガティブな理由・側面に対して、私はいまだに解決策を持っていない。かわりに私がオンライン授業をリアルタイムで行うためにしたのは、カメラとマイクをオフにしてみるということだけである。

カメラもマイクも使わないオンライン授業をリアルタイムと呼べるのか。当然、そういう疑問を持たれるであろう。だが、そう呼べると証明したいというのが、本稿の目的の一つでもあると言いかけておきたい。無論、こう言ったからといって、最新のテクノロジーを駆使

¹ 国立情報科学研究所「データダイエットへの協力をお願い:遠隔授業を主催される先生方へ」(<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/tips.html>)

した授業への取り組みを否定するつもりはない。むしろ、そのような実践例を学ばせてもらうことから得ることは多いし、刺激も大いに受けている。ただ、ここで考えたいのは、そうして得たもの、受けた刺激を有効に活用するために、オンライン授業で目指されるべきなのはどのようなことなのか、ということだ。テクニックだけを真似ても意味がない。テクニックを利用するための前提として、私自身がオンライン授業のために考え、実践したことを示していきたいと考えるのである。

さて、話をカメラとマイクをオフにしてみようとした段階に戻すことにしよう。これによってリアルタイムのオンライン授業からは何が失われるか。学生の側から言えば、私の顔が見えなくなるし、私の声が聞こえなくなる。当然のことだ。だが、それだけならば、録画しておいた動画を配信することでも簡単に補える。あえて言うなら、一定の期間だけ動画を視聴できるようにしておくことで、特定の時間帯に学生を机の前に座らせることすら可能だろう。

けれども、そのように一定の時間を拘束されることに、学生がリアルタイムのオンライン授業の価値を感じるわけでないことは明らかである。逆に言えば、拘束されているわけでもないにも関わらず、決まった時間に教員の顔を見て、声を聞こうとするのだとすれば、それはその時間だけ、録画して用意されたものとは違う、教員のリアルタイムの反応を得ることが出来るからだと考えべきだろう。そしてそれが本当にリアルタイムの反応であると感じられるためには、自分であるにせよ、他の誰かであるにせよ、その場で教員に働きかけたという事実がなくてはならない。つまり、学生の側もマイクをオンにして、教員に話しかける準備を整えて参加していることにより成立しているのが（実際には話しかけることがないとしても）、リアルタイムのオンライン授業の基本形ということになる。

では、学生の側がマイクをオフにしたら、そのような働きかけが出来ないのかと言えば、そんなことはない。チャットという方法があるからである。Teamsではテレビ会議の最中でもチャットが出来るようになっている。YouTubeのライブ配信などで、コメントが次々と投稿され、それにユーザーが応えていくのと同じようなことが、Teamsのテレビ会議を利用した授業でも可能なのである。こうした働きかけに対し、教員が表情豊かに反応するとすれば、学生たちも安心感や授業への一体感を得られるに違いない。

ただ、そうした時間は、本を読んだり文章を書いたりを中心の日本文学の授業の中では、ほんのわずかな割合を占めるだけのものであり、またその時間が、どのようなタイミングで訪れるのかもなかなか予想しがたい。そのためだけに、教員側がカメラやマイクをオンに戻しておく必要があるのかと言いたすと、話は堂々巡りになってしまう。もちろん、そうした反応をする時の表情の一つ一つが持ち味になっている教員もいるだろうから、やはりカメラやマイクはあった方が良いという意見を否定するつもりはない。だからこそ学生の発言を頻繁に引き出すような授業計画を立てるべきだ、という発想もありうるだろう。だが他方、私のようにそこまでの表現力・指導力に自信のない（あるいは重きを置いていない）教員にとっては、カメラやマイクはオフにしたままで、チャットにはチャットで答えるということにしても、得られる成果はさほど変わらないのではないだろうか。文章を駆使することに慣れていない小学生を対象としているならまだしも、相手は短大生（しかも日本語日本文学科生）なのである。いや、ぶっきらぼうな顔つきで答えるよりも、絵文字でも加えて、文字にして反応した方が、かえって良い印象を与えるということすらあるかもしれない。

ともあれ、このように考えてくれば、リアルタイムのオンライン授業において、カメラやマイクが一定の役割を果たしうるとしても、それが日本文学の授業で必須というわけではないことは明らかだろうと思う。むしろ必要なのは、リアルタイムの双方向的な通信手段なのであり、それはチャットを使うというだけで簡単に解決する。テレビ会議を利用している時でなくても、チャットはTeamsで使える標準的な機能だ。講義系の授業ではもちろんのこと、演習系であっても、動画とチャットの組み合わせで、カメラとマイクを使ってリアルタイムに授業を展開するのと近い効果が期待できると考えたわけである。

ところで、その場合の動画である。日本文学の授業において、動画を用意することには、どの程度の必然性があるだろうか。先にも触れたように、自分の顔と声とを延々と見せて聞かせるだけでは意味がない。動画を用意するのは、動画の方が説明しやすいことを伝えようとするからだろう。ところが、日本文学の授業で必要とされるものは、基本的に作品の本文という文字データである。もちろん、対面の授業では映像資料などを併用する場合もあるが、ネットで配信するとなると、「授業で使っている」という限定条件がなくなってしまうため、既存の映像を使うと著作権の問題に抵触する可能性が高くなる。その心配のない資料を用意するには、それなりの準備が必要で、今回は間に合わない。

そう考えると、動画を用意する必要も少ないように思われた。そこで私は、この動画の部分を、PowerPointのスライドに置き換えることにした。作品本文を提示するところだけでは朗読の音声を入れたが、後は伝えたいことを聞かせるのではなく、読んでもらうことにしたのである。スライドを読んでもらって、それに関する質問などのやりとりをチャットで行う。これをリアルタイムのオンライン授業の基本形と位置づけ直したということだ。その上で、担当している授業の、それぞれの性格にあわせて、諸々の要素を付け加えていったのである。それを次に具体的に示していくつもりであるが、その前に、一つだけ先に触れておきたいことがある。このスライド自体への工夫についてである。

対面の授業でPowerPointを使う場合は、そのスライドに示した情報で重要なところを口頭で強調するとか、逆に口頭で説明する重要な点だけをスライドに示しておくことが多いであろう。だが、動画にするような話の内容をスライドにすると、その全体をすべて読んでもらうような作り方をすることになる。当然、対面の授業でスライドを見る場合より学生の負担感が大きくなるのが予想されるわけで、これまでに作ってきたスライドの場合より、かなり気をつかって作成する必要があった。この作業には、当初想定していたよりもかなり時間がかかることとなり、授業以外の学務をこなすのに支障が生じることもあった。したがって、この方法がオンライン授業のための効率的な最適解であると胸を張って言うことは出来ない。ただ、一度作ったスライドは今後の資産となるとは言える筈で、動画の場合よりも手直しがしやすい点はメリットだと思っている。

また、学生がスライドを読む際の負担感を緩和するために、フリー音源からBGMとなるものを探してきて、スライドに加えるということも試みた。こうした試みに対する反応も含めて、私の用意したスライドに対するアンケートもとってみたので、その結果を示しておく。

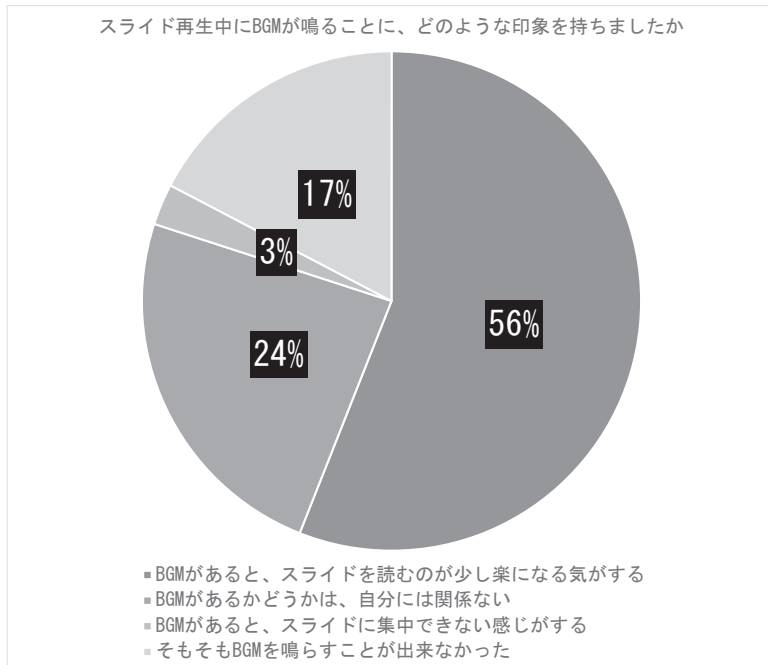


表 2-1 スライド再生中にBGMが鳴ることへの学生の反応

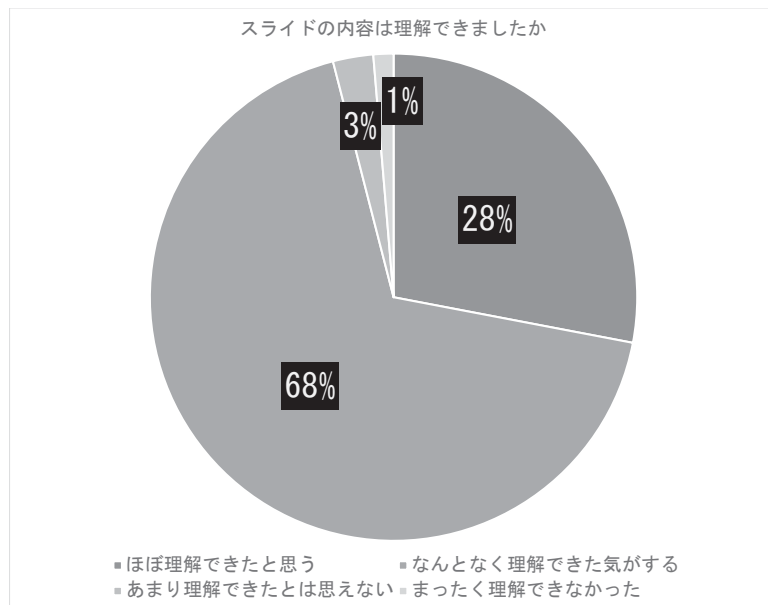


表 2-2 スライドに対する学生の手応え

表 2-1 (BGMを使ったことに対する反応) と表 2-2 (スライドの難易度に対する反応) との間に、さほどの相関関係があるとは言えないが、こちらが工夫したことに対する学生か

らの反応の感触は、総じて悪くなかったと言っておくことは許してもらえないだろう。ちなみにこのアンケートをとったのは授業の初回だったので(必修科目「日本文学概説」で5月15日実施・回答期限5月22日、受講者数78名・回答者数75名、その他の実施方法は前節に示した「現代文書A」でのアンケートの時と同じ)、多少無難な回答を選ぶ傾向があったということはあろうかと思う。他方、表2-1で「BGMを鳴らすことが出来なかった」という学生が17%もあるなど、まだTeams(あるいはOffice365)の操作に不慣れな部分も窺われる。教員の方が授業内容以外の部分で新しいことを試してみるとしても、それに学生の側が簡単についてこられるとは限らないということだ。この私が試みた事例は、新しいと称するにはあまりに凡庸なものであるけれども、テクノロジーの進化に合わせてそれを最大限に使おうとする際にも、同様の問題が起こる可能性は残る。この点には、今後も注意を払っていく必要があると思われる。

3 学生相互の繋がり

コロナ禍にあって、私が担当していたオンライン授業は、以下の6科目である。

- ・現代文書A(1年生対象、演習科目、必修)
- ・日本文学概説(1年生対象、講義科目、必修)
- ・日本文学基礎演習(1年生対象、演習科目、必修)
- ・卒業研究(2年生対象、演習科目、必修)
- ・プレゼンテーション演習Ⅱ(2年生対象、演習科目、選択)
- ・日本文化論A(常葉大学外国語学部生対象²、講義科目、選択)

このうち、「日本文化論A」では、他学部の学生を対象とした授業ということもあり、Teamsを使わず、オンデマンド式でスライドを配信し、課題提出を求めるという形式をとった。その他の科目ではすべて、前節に示したような、スライド配信とチャットの組み合わせという基本形の上に、それぞれの科目の特色を反映させることを試みたので、以下にそれを説明していく。

まず、基本形そのものの形で展開することになったのは「卒業研究」である。この科目は、学生が卒業論文を纏めるための授業で、もともと個人指導が主体の科目である。対面で行う場合には、時間を指定して個人研究室での面接を行うわけだが、この面接の部分がチャットに置き換わったことになる。

成果としての卒業論文が提出されるのが年末なので、この置き換えがどのような効果・影響を及ぼしたのかを述べることは、現段階では出来ない。ただ、指導する立場から言うと、チャットで文字に残すことにより、過去の指導内容を随時確認できることとなったのは、思いがけず有効であった。通常の個人面接では指導内容をメモしておき、それを踏まえて次回面接をしていくわけだが、どうしても記憶が曖昧になる部分がある。これはテレビ会議を

² 本学は四年制の常葉大学と同一キャンパス内にある。

使った場合でも同様だろう（録画しておくことは可能だが、指導の度に再生していたのでは効率的とはいえない）。これに対し、チャットだと、指導中であっても、かなり自由にそれまでの話の内容を遡って見直すことができる。

また、対面の個人面接では、すべての学生にあてはまるような説明も、学生ごとに繰り返す必要が出てくる。もちろん、その部分は全員を教室に集めて話すようにしても良いのだが、わざわざそのためだけに出席を求めるには、情報量が少ないということもある。これに対し、スライドを併用したオンライン授業では、そうしたところをスライドで読んでもらい、その上で面接を行うという流れをつくることが出来た。この点は、対面の授業であっても、オンデマンド式で事前にスライドを見ておいてもらうなど、取り入れることが可能かもしれない。面接時間（密接）の短縮にもなる筈だ。

教員と顔を合わせることがないままでの指導というのは、学生からすると不安感もあったらと思うが、今のところ、それが大きなマイナスになったというケースには出くわさずにすんでいる。

「現代文書A」も、ほぼ基本形どおりの授業となった。「書くこと」に特化した科目なので、演習科目ではあるが、作業は個人で行うものばかりである。スライドを提示し、課題を出し、その課題に対する質問にチャットで答えるという流れになった。毎回たくさんの質問が出るというわけでもないので、その分、提出された課題に対するフィードバックを、スライドの中で多めに示すことを心がけた。

また、クラス単位の授業ということもあり、クラス役員を決める必要がある場合など、授業以外の部分でリアルタイムであることが役立つこともあった。

これに対し、同じ演習科目でも、「日本文学基礎演習」と「プレゼンテーション演習Ⅱ」は、学生同士で協力しながら課題に取り組む必要のある科目である。チャットは教員と学生とで個人的にやりとりをするのには向いているが、ここに複数の人間が同時に参加できるようにすると收拾がつかなくなってしまう。Teamsの場合、チャットのスペースは科目（チーム）ごとに区切られているわけではないので、先に述べた「卒業研究」の個人指導をはじめとした個人間のやりとりと、誤って混線させてしまうことも心配である。

そこでこの二つの科目では、チャットと似た機能ではあるが、投稿と、それに対する返信を活用することで、学生間のコミュニケーションをとってもらうことにした。Teamsでは、チームのメンバーが自由に投稿をすることが出来るようになっており、その投稿に対して他のメンバーが返信する機能も備わっている。この投稿にはタイトルをつけることも可能なので、これにより、いわゆるスレッドを立てたのと同じような環境を実現できる。これを利用したのである。

具体的には、まず学生をグループ分けした表を用意する。これを投稿で発表すると同時に、そのグループごとにタイトルをつけた投稿（スレッド）を用意してやるのである。学生は自分が所属するグループのために用意された投稿（スレッド）の中で返信をしていくことで、相互にコミュニケーションがとれるという具合である。

実は Teams にはチャンネルという機能も用意されていて、チームのメンバーをチャンネルに分割し、そのチャンネルごとに作業をさせるということも可能なのだが、使わなかった。学生

はインターネットの掲示板などでスレッドの概念に慣れているだろうと思ったし、教員の側からすると、チャンネルだと切り替えながら巡回する必要がある。それよりはスレッドで分けられているとはいえ、一箇所で議論をしてもらっていた方が、その様子が俯瞰しやすいと考えたからである。

この試みは、ほぼ狙いどおりに機能したと言って良いと思う。むしろ、対面の授業でこうした作業をさせると、周囲を意識して小声でのやりとりになってしまいやすく、こちらから積極的に働きかけないと作業の進捗状況が把握しにくい。だが、その声が文字になると様子が一目瞭然であり、それらを踏まえた全体へのフィードバックも容易だった。学生にとっては対面授業から失われるものばかりが意識されやすいオンライン授業だったかもしれないが、教員の側からすると対面授業では十分に見えていなかったものが視覚化されるという、リアルタイムのオンライン授業ならではの、思わぬ収穫があったということだ。

ただ、そうした作業を経た上での発表のさせ方には、課題も残った。グループごとの発表のためにも、そのためのスレッドを用意し、その返信を使って発表をしていくことを求めたのだが、その発表をしている間に仲間の反応が見えないことが、やりにくさにつながったようである。中には「いいね」ボタンを押すことを求めるなど、仲間の反応を引き出す工夫をしている学生もいたが、この点はどうしても対面の授業に及ばなかった。発表だけはテレビ会議で行わせるということもありえただろうが、仲間の反応が見えにくいという意味では大差がない。

このことから窺われるように、オンライン授業で失われる最大のものは、やはり学生相互の繋がりなのではないかと思う。教員と学生との間のコミュニケーションだけならば、リアルタイムのオンライン授業にすることによって確保できるし、リアルタイムでないとしても、提出された課題に対するフィードバックなどによって、ある程度維持することが可能であろう。けれども、それは教員から放射線状に伸びた線に、個々の学生が繋がっているという構図でしかない。教員の側からすればそれで十分なのかもしれないが、現実には、そのような放射線状の繋がりよりも、そこで蜘蛛の巣のように張り巡らされた学生間の繋がりの方が重要な位置を占めているというのが、大学生活の本質なのではないだろうか。特に新入生の場合、SNSを通じて連絡を取り合う用意すらできていなかった筈である。「日本文学概説」では、そのことを意識したささやかな試みをしたので、最後にその紹介と結果を示して、まとめとしていきたいと思う。

前節でも述べたが、リアルタイムのオンライン授業の意味を、最も見出しにくかったのが講義科目である。そして私が担当した Teams を使ったオンライン授業で、唯一の講義科目が「日本文学概説」であった。したがって、話の順序とは逆転するが、どのようにオンライン授業を展開するかを考える時に、真っ先に考えなければならなかったのが、この科目のことであった。リアルタイムであることの意味があるのか。リアルタイムであることに意味があるようにするには、どうすれば良いか。

まず、出席をとることにした。課題の提出を以て出席とすれば良いようなものであるが、それならばオンデマンド式の課題提示でも同じことである。「出席をとります」というタイトルの投稿をしておき、授業開始時間になったら「出席」と返信するように求めた。その際

にフライングをしないようにという注意も加えておいた。チャイムが鳴る音を、学生たちの心の中に意識させたいと思ったからである。この結果は、なかなか壮観であった。スクリーンショットをとっておかなかったのが残念なのだが、ほとんどの学生が授業開始時刻になると同時に返信をしてきたのである。ゲーム感覚だったのかもしれない。仲間と競うように返信をしていくという体で、最初の数分で70名以上の学生が集まってきた。

話が前後するが、この方法は他の4科目でも使った。どの科目でも同じような傾向ではあったが、二年生対象の科目よりは新入生対象の科目の方で、よりこの傾向が顕著であった。新入生の方が真面目なのだとさえいえばそれまでだが、仲間の存在を感じる機会を、より強く求めていたのが新入生だったとも言えるのではないだろうか。

そして授業では、私語を認めることにした。もともと私自身は対面の授業であっても、私語には比較的寛容な方だと思う。明らかに熱心な学生の妨げになっている場合には注意するが、多少授業に関係のない小声の会話が聞こえてきたとしても、それを咎めることはしていない。一見、授業に集中していないように見えても、そうやって頭を活性化しておくことで、意外に授業の要点を捉えている学生が多いということも、日頃から感じているからである。まして、オンライン授業では声が聞こえない。スライドを見る妨げになるということもない。だから、いくつかのトピックをタイトルとした投稿をしておき、その返信を使って自由に雑談をして良いというようにした。用意したトピックとその結果（発言数）は、下表のとおりである。

	5/15	5/22	5/29	6/5
授業関連	44	43	21	10
アイドル	44	14	0	0
アニメ	100	13	6	0
クッキング	30	13	0	7
ゲーム	122	34	17	36
ファッション	設置せず	20	54	41
ライトノベル	9	4	0	0
フリートーク	86	42	23	16

表 3-1 講義科目で設置した投稿スペースのトピックと発言数

5月15日が、この授業の初回である。一見して、新入生が仲間との会話を渴望していた雰囲気が窺えるであろう。授業は15時開始で、毎回16時に簡単な課題を提示していた。スライドを見るのに要した時間が、速い学生なら15分程度だったとして、45分の間にこれだけの発言があると、ほとんど休みなく会話が弾んでいるという印象である。また、授業に無関係な発言につられるようにして、授業に関わる発言もそれなりにされておき、授業それ自体にとっても、一定のプラスの効果があったと見て良いかと思う。実際この後に提出された課題（小レポート）を読んでもみると、自身が発言はしていなくても、ここでされていた授業関連の発言に刺激されたとするものなどもあり、良い方向で回転していることが感じられた。

5月22日以降の発言数は次第に落ち着いていくし、決まって発言する学生ばかりが仲間になってしまっていて新たに会話に加わりにくいといった声が聞こえてくることもあった

が、このオンライン授業だけの状況が続くようならば、もう少し活性化させる方法はあったと思っている。ただ、この後、対面の授業が部分的に再開されるようになってからの、6月12日以降の授業では、発言数が激減した。学生相互の繋がりを確保するという意味での、このスペースの役割は、実際に会って話をする機会が用意されたことで終わったということであろう。

今回、なかば強制的にリアルタイムのオンライン授業をやらざるをえなくなったわけだが、苦勞しつつも取り組んできて、現時点ではその可能性の大きさを感じている。それは、単純にすぐれたテクノロジーを活用すれば、対面の授業と同等の授業ができるという意味ではない。そうではなく、むしろ対面の授業に比べて不自由な部分があるからこそ、何を学びとってほしいのかという、日本文学の授業の優先順位が明確になってくると感じられたからである。

日本文学を学ぶ上では、何と言っても作品を読むことが第一である。それは動かない。だが、本を読む時間を確保するというだけならば、オンライン授業はリアルタイムである必要がない。むしろ逆だろう。時間割に縛られながら通学する必要がなくなった分、読書の時間が存分に用意されるようになったのがコロナ禍であったと、逆説的に言ってみることも出来るかもしれない。

けれども、それで作品に対する理解が深まる時間も確保されることになったのかと言うと、おそらくそうではない。理解を深める時間としての、日本文学の授業の重要性は、やはりある筈なのである。そして、その授業の時間は、ただ何かを教わるだけの時間でもない。教わり覚えるだけならば、やはりリアルタイムである必要はない。そこに学生自身が能動的に関わろうとすることで、作品への理解は深まっていくのであろう。教えるためのスライド作成に苦勞しつつも、そこで完結させるのではなく、さらにチャットを併用していく必然性はその点にあったと、現時点では思っている。同時にその能動的な関わりは、学生と教師との間だけで実現されれば良いというものではないということも、改めて感じた。

学生たち相互の繋がり。ここにおそらくオンライン授業の肝も、キャンパスの存在意義も凝縮されているのではないだろうか。それはまた、巡り巡って何故文学を学ぶのかという問いにも戻ってきそうなのであるが、話が広がり過ぎるようである。ひとまず、ここで稿を閉じることにはしたい。